



復興・再生へむけて

復興と感謝の調べ

仙台フィルハーモニー管弦楽団 ロシア公演

被災地唯一のプロオーケストラとして、震災直後から被災者のもとに音楽を届ける活動を続けてきた仙台フィルハーモニー管弦楽団。「音楽の力」によって復興へと歩む被災地の姿を伝えるため、震災後に海外から寄せられた支援への感謝を込めて、仙台フィルハーモニー管弦楽団ロシア公演を実施しました。

東日本大震災から2年を経た2013年3月、仙台フィルハーモニー管弦楽団がロシアのモスクワとサンクトペテルブルクで、計3回の演奏会を実施しました。震災直後、ロシアからは、2隊の計156名にも及ぶ救助隊員が宮城県石巻市に派遣されて捜索や救助活動にあたり、被災地に向けて多くの救援物資や寄附も届けられました。またサンクトペテルブルク・フィルハーモニー交響楽団は指揮者のユーリ・テミルカーノフ氏とともに、震災の翌月である2011年4月、終えたばかりの米国公演の収益金から4万米ドル近い義捐金を「同じオーケストラとして力になりたい」として仙台フィルハーモニー管弦楽団に贈っています。今回の公演は、ロシアから被災地、そして仙台フィルへの支援

公演	2013年3月27日	サンクトペテルブルク・フィルハーモニー交響楽団大ホール	観客数：1,550人
	2013年3月30日	モスクワ国立音楽院大ホール	観客数：1,200人
	2013年3月31日	モスクワ国立音楽院大ホール	観客数：1,300人
学校訪問	2013年4月1日	モスクワ・第1959番学校	

に対する謝意を表したいとして、また音楽によって、復興へ向かう被災地の姿を伝えるために企画されました。仙台フィルは、被災者のために数々のチャリティコンサートを続け、被災地の人びとと復興への歩みをともにしてきた「被災地のオーケストラ」です。「仙台フィルの海外公演が実現したらみんな喜ぶ」、「復興に向けてく楽都仙台>らしい音楽を通じた国際交流ができれば」等、出発に至るまでにも、地元関係者のみならず、東北各地から沢山の応援の言葉が届きました。

“復興コンサート”の活動について

仙台フィルは、震災により活動拠点であったホールが甚大な被害を受けて活動の場を失い、数カ月間、活動を休止せざるを得ない状況にありました。しかし、震災前から学校訪問など地元市民と密着した活動に重きを置いてきたオーケストラは、「困難な時だからこそ、音楽の力で市民を支えたい」と、「音楽の力による復興センター」を創設し、震災後わずか2週間後の



【上と前頁】サンクトペテルブルク公演より
【下】モスクワ公演での宮城三女OG合唱団 ©Anna Rybalco Photography

2011年3月26日から「復興コンサート」の活動を開始します。日本では多くの催しが自粛されていた状況での活動再開でした。楽団員たちは避難所、病院、学校、仮設住宅に赴き、余震に悩まされながらも被災者のもとに音楽を届ける活動を続け、2年間の間に300回近くのコンサートが行われました。「音楽の力」は、家族やそれまでの暮らしを失った多くの人びとを慰め、励まし、地域再生への歩みを支えたと言われています。「震災後涙も出なかったが、仙台フィルの音楽を聴いて初めて泣くことができた」という聴衆の声は少なくありません。復興コンサートの活動のようすは今回、ロシアでも紹介されました。

復興と感謝の調べ

ロシアでの公演では、震災で亡くなられた方々への追悼の意を表す武満徹の「弦楽のためのレクイエム」や、ドヴォルザークが遠く自らの故郷を想って作曲し、仙台フィルの復興コンサートでも度々演奏された「新世界より」、また、ロシアでも高い人気を誇るヴァイオリニストの神尾真由子氏をソリストに迎えた、チャイコフスキーのヴァイオリン協奏曲などが披露され、パスカル・ヴェロ指揮による演奏に、会場に詰め掛けた満員の観客は聞き入りました。アンコールで演奏された日本の唱歌「故郷」が終わると、仙台フィルのメンバー達はロシアからの支援への感謝の意を伝える横断幕を掲げて、客席からの歓声に応えました。

指揮：パスカル・ヴェロ／Pascal Verrot

仙台フィルハーモニー管弦楽団常任指揮者。フランス・リヨン出身。アメリカ、カナダ、フランスの楽団で指揮者、音楽監督を務めたのち、2006年4月、仙台フィル常任指揮者に就任。そのはつらつとした指揮は多くの人を魅了している。

ヴァイオリン：神尾真由子

2007年第13回チャイコフスキー国際コンクールで優勝、一躍世界で注目を集める。ニューヨークのリンカーン・センターをはじめとする世界各地でのリサイタルは絶賛を博し、また数々の著名な指揮者やオーケストラと共演している。

仙台フィルハーモニー管弦楽団

1973年、市民オーケストラ「宮城フィルハーモニー管弦楽団」としてスタート。78年よりプロ・オーケストラとして活動を開始。89年に本拠地の名を冠し「仙台フィルハーモニー管弦楽団」と改称。仙台の音楽文化の振興に大きく貢献している。

宮城三女OG合唱団

2001年12月に宮城県第三女子高等学校（現・宮城県仙台三枝高等学校）音楽部のOGで結成された合唱団。主な活動としてコンクールへの参加や各種イベントへの出演、海外での公演など幅広い活動を展開している。

プログラムA	3月27日	武満徹	弦楽のためのレクイエム
	3月31日	チャイコフスキー	ヴァイオリン協奏曲ニ長調 作品35
		ドビュッシー	夜想曲
		ドビュッシー	海—管弦楽のための3つの交響的素描
プログラムB	3月30日	エルガー	「エニグマ変奏曲」より第9変奏「ニムロッド」
		ビゼー	歌劇「カルメン」より抜粋
	3月31日	外山雄三	管弦楽のためのラプソディ
		ドヴォルザーク	交響曲第9番ホ短調 作品95「新世界より」

制作 公益財団法人 仙台フィルハーモニー管弦楽団
制作協力 一般財団法人 音楽の力による復興センター・東北

その姿に総立ちとなった観客からさらに大きな拍手が贈られ、支援への感謝と、音楽の力で復興へ歩む被災地の姿を力強く印象づける公演となりました。

また、開演前の会場では、オーケストラ団員達が「ありがとう—Спасибо」と日露両国語で書かれたステッカーを来場者ひとりひとりに手渡し、各公演の会場では、仙台市の復興の現状や、仙台フィルが続けてきた復興コンサートのようす、海外から寄せられた数々の支援などが写真パネルや映像で紹介されました。仙台に伝え継がれる大きな七夕飾りも展示し、公演に訪れた多くのロシアの人びとの目を惹きつけました。



仙台フィルが2011年4月に仙台駅に近い公共スペースで開催した復興コンサート。地元の人に寄り添った活動が多くの人々の心を癒した
撮影：永井秀男



モスクワの第1959番学校を訪問したこの日の演奏は、弦楽四重奏や木管五重奏のスタイルで。ロシア民謡「カリカ」等が演奏された◎



第1959番学校では仙台フィルのメンバーが演奏しただけでなく、学校の生徒達も歓迎の歌と踊りを披露してくれた◎

第1959番学校を訪問

3つの公演が終了した4月1日、仙台フィルのメンバー10名がモスクワ近郊の第1959番学校を訪問しました。この学校は日本の小学校から高校にあたる年齢の生徒が通う学校で、東日本大震災の際には全校で千羽鶴を折ってモスクワの日本大使館に届けてくれました。今回の訪問にあたって、校長先生はじめ学校を挙げてメンバーを歓待してくれました。

仙台フィルのメンバーは、復興支援活動を紹介し、弦楽四重

奏や木管五重奏で、前日までの大ホールでのフルオーケストラによる荘厳な演奏とは趣の異なるしっとりとした演奏を披露。そのお返しに、学校の先生やお揃いの衣装に身を包んだ生徒達も、可愛らしい歌を聞かせてくれました。仙台フィルのメンバー達によるミニ音楽ワークショップでは、生徒全員が椅子から立ち上がって体を動かす盛り上がりぶりで、最後は、震災後度々なく被災地で口ずさまれ、サンクトペテルブルクとモスクワ公演のアンコールでも披露した「故郷」を全員で合唱し、温かい交流の場となりました。



サンクトペテルブルクやモスクワでの公演では、全曲目の終了後、ロシア語で「ロシアのみなさまのご支援に心から御礼申し上げます」というメッセージが書かれた横断幕を掲げ、被災地からの感謝の意をロシアの聴衆に届けた

仙台・河北新報社より仙台フィルロシア公演取材のため全行程に同行した菅野俊太郎記者のレポートより

「聴衆が総立ちになった熱演」

公演は27日、サンクトペテルブルクで幕を開けた。テミルカーノフ氏が音楽監督を務めるサンクトペテルブルク・フィルの本拠地、フィルハーモニー大ホールは開場と同時に1500席全てが埋まり、通路で立ったまま聴く人もいるほどだった。最初の曲は武満徹「弦楽のためのレクイエム」。被災者に黙とうをささげる鎮魂歌を選んだ。次の曲は、2007年のチャイコフスキー国際コンクールで優勝した神尾真由子さんをソリストに迎えたチャイコフスキー「ヴァイオリン協奏曲」だ。神尾さんは艶やかに、そして凛とした音色を奏で、オーケストラが応

えていく。特に第3楽章で、独奏ヴァイオリンと、オーケストラの弦管楽器が競い合うように演奏するところが印象的だった。後半は、ドビュッシー「夜想曲」「海一管弦楽のための3つの交響的素描」。夜想曲は仙台フィルに同行した宮城三女OG合唱団が第3曲の「シレーヌ」で参加。美しい歌声を披露した。アンコールの唱歌「故郷(ふるさと)」でも合唱団が美しい歌声を聴かせた。公演後、聴衆は総立ちで熱演をたたえた。ロシアの支援に感謝を伝える横断幕を楽団員が掲げると、拍手は一層大きくなった。舞台上では、目頭を押さえる楽団員の姿も見られ、感動的なフィナーレだった。私は仙台フィルに限らず、クラシックの演奏会にずいぶん足を運んできた。その中で涙腺が緩んだのは今回が初めてだ。

*本稿は国際交流基金「をちこちMagazine」に菅野記者が寄せたレポートの抜粋です。なお、本事業の取材記事は3日にわたり河北新報に連載されました

公演について寄せられた声

素晴らしかった。オーケストラの特別な思いが今夜の演奏から感じられた。
[公演来場者 3月27日 サンクトペテルブルク]

またいつかモスクワで仙台フィルの公演を聴きたいです。
[公演来場者 3月31日 モスクワ]

私達こそ感謝の気持ちを感じている。公演が喜びを与えてくれたから。この催しは、友情と連帯の証だ。
[公演来場者 3月30日 モスクワ]

もっと日本の文化について知りたいです。
[公演来場者 3月31日 モスクワ]

被災地の人びとを自分のことのように案じています。速やかな復興を心よりお祈りします。
[モスクワ音楽院関係者 3月27日 モスクワ]

生徒・児童たちに素晴らしい音楽交流の機会を与えてくれたことに感謝したい。
[第1959番学校関係者 4月1日 モスクワ]

2011年3月の悲劇の記憶に捧げられた演奏だが、晴れやかな雰囲気にも包まれた公演は心地よいものだった。素晴らしいコンサートに感謝する。このような催しを定期的に行うことが日本とロシアの両国民の間の友情の精神を強めるのに役立つと確信している。
[3月31日、セルゲイ・カルギノフ国家院(下院)議員からの礼状]

仙台が、日本が、早く復興するように祈っています。
[公演来場者 3月31日 モスクワ]

遠く離れた日本とロシアがひとつになったことを強く感じた。
[第1959番学校関係者 4月1日]

演奏した方々の心の温かさが伝わりました。
[公演来場者 3月31日 モスクワ]

ロシアの人達に言葉にできない温かさを感じた。音楽を通じて支援への感謝を伝える役割を果たせたと思う。公演の成果を仙台などでの活動に活かしたい。
[仙台フィル楽団員 3月31日 モスクワ]

自分の出した音が遠く、どこまでも伸びていくような、日本のホールでは味わったことがない初めての体験。この経験がオーケストラの記憶としてこれから役に立つ。
[仙台フィル楽団員 3月31日 モスクワ]

この見開きの◎印の写真 ©Anna Rybalco Photography



震災直後のようすや復興に向かう被災地の姿が写真や資料で展示され、聴衆が見入っていた



東北三大まつりのひとつ、「仙台七夕まつり」の飾りもホールロビーに登場



各公演会場で、演奏に先立ち、日露の言葉で「ありがとう」と書かれたステッカーを仙台フィルの楽団員達が聴衆に手渡してプレゼント



サンクトペテルブルクの公演で、耳の肥えた聴衆から大きな拍手が仙台フィルに贈られた



第1959番学校では、楽団員がワークショップを行い、生徒全員が立ち上がって体を動かす盛り上がりぶり◎



第1959番学校で、9年生(中学3年)の生徒が客人を迎える際の伝統的なお菓子カラヴァイを持ち出してくれた◎